
一つ家の鬼娘！

ぱんくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一つ家の鬼娘！

【Nコード】

N5052W

【作者名】

ばんくん

【あらすじ】

「安達ヶ原の鬼婆」と「浅茅ヶ原の鬼婆」。

二つの物語が交差し、平凡な高校生「遠藤芳樹」に降りかかる。

「何故自分が」と悩むが、そこには抜け出せない運命があった。

ハタシワダレ

昔、東京に鬼婆が居たという。

詳しい事は分からないが、俺はその鬼婆と関係がある池の跡地の近くに住んでいる。

どういう関係かは分からないし、特に怖くもないのでこんな薄暗い午前3時に散歩している。

「ねーみ。」

夏なのでそんなに寒くない。むしろ暑い。うん、暑い。

なぜこんな時間に散歩しているか気になるだろう。簡単に言うと寝ないようにだ。何故寝たくないかと言うと、今寝ると学校に遅刻するからだ。

俺は夜遅くまで起きていると朝起きられないから寝ないで学校に行く。

勿論学校で思いっきり寝るけどな！

まあとにかく散歩をしている。暇そうに。

「う。。。。う。。。。う。。。。」

マジで？見間違いだよな？ほらあそこ。あそこにいる。

「見間違えといてくれ~~~~!!!!!!」

マジか！嘘だろ見ちゃったよ!!!白い女の子!やばい!逃げねば!!!

「あの〜」

「ひいっ!」

「すっ、すみません!脅かしちゃって」

えっ?人?人間?ヒューメン?

「あのお、大丈夫ですか?」

「あつ、ああ。大丈夫。うん」

心臓とまりそうだったけど。

「あの、こんな時間になにしてるの?」

「すみません。道が分からなくなっちゃって」

「そうなんだ。俺で良ければ案内するよ」

「ありがとうございます。この近くに池はありませんか？」

ん？池？この近くに池は。あぁ。

「この近くに昔、池があったらしいけど、もう埋め立てられちゃったよ？」

「えっ？」

なんだろう。俺が生まれてくる前に埋め立てられたらしいけど、知らないのかな？それに見たことない子だけどここらへんの子かな？

「えーと、俺、遠藤芳樹。君は？」

「私？私は、誰？」

えと、これは

記憶喪失？

いみわからん

俺は一人暮らしだ。親父は仕事で海外だ。お袋はそれについていた。理由は仕事先がワイ八だからだ。子供よりワイ八をとった。

俺は一人暮らしだ。だった。だったらしい。さつきまで。

「早くしろよ。早くメシ作れよ。家出しちゃうぞ」

これがだれだかわかるか諸君。さつき会った女の子だ。池の跡地まで行くとしたら

「あなたの家ってこの辺ですか？のどが乾いたのでお水が欲しいんですけど」

自販機ないし家近いから家まで連れてきたら、

「いい家ですね。お一人で暮らしているんですか？」

って聞いてきたから「はい」と答えたら

「よし決めた！俺ここに住む！お前俺の召使いにしてやる！メシ作れ！」

え？何が起きた？どうしたんだ？

「おい何してんだ。早くしろよ召使い」

「あつ、あれ？キミ女の子だよな？てかこの家に住む？召使い？」

わけわからん。

「当たり前だ！女に決まってるだろ！ナイスバディーすぎるだろ！」

「え、ええと、召つ」

「早くしろ！ハラへった！」

「早くしろよ。早くメシ作れよ。家出しちゃうぞ」

意味分かんない。家出してもらいたい。てか住むとか冗談だよな？兎に角うるさいからメシを作ることにした。

いみわからん（後書き）

今回は突然家族になった不思議な女の子の話です。

「いっっッッ

暗い。クライ。苦しい。クルシイ。ここは。ココハ。どこだ。

ドコダ。私は。オマエハ。誰だ？ オマエハ！

「ッ！？ あ、あれ？ここはどこだ？俺は 確か ？」

わからない。自分が誰かも、ここがどこかも、何もわからない。
なんなのだろう。よく分からないけどなぜか、凄く悲しい。分
らないが、何かに溺れていた気がする。

まあとりあえず家に帰 れない。分からない。でも、凄く

温かいぬくもりがある家が会った気がする ツ ！？

「コロセー！キリサケー！カミクダケー！アイツヲー！」

ッなっ、なに？さっきの？殺す？誰を？切り裂く？何を？

と、とりあえず。何かに溺れていた気がするから海とか池を探そ
う。

ん？あそこにバカそうな男がいる <ニタア

ケツケツケツ。家発見だな。ククク

「あのお

「で、こうなったわけか」

「うん、このオムライスそんなうまくないな。むしろへた」
こいつっ

「ふう。まあとにかくソレ食ったら出てけ」

「ゴツゴホゴホツ　うえっ」

むせたよきつたねーな

「おっ、おまつ　ゴホツ　ッ　うえっぶっ」

「おいおい大丈夫かよ。女なのにカワイクねー」

「お前はこんな身よりのないか弱き乙女に家から出てけつたんだぞー！」

「当たり前だ！第一まだ名前も知らない女子と一緒にくらせるか
！！」

「男なのに根性ねーな！タマ千切るぞ！」

「か弱い乙女がそんなこといってんじゃねえ！それに男だから気にすんじゃねーか！」

「メンドクセー奴だな！お前なんかといたいと思う奴ぜってーいねーよ！」

「じゃあ出てけ！」

「えっ？」

おお？

「こいついやっ、べっ、別に本気でいっただんじゃ
っ　　んう」

おお。恥ずかしがってる。結構カワイイかも。

「こいつ、いいから俺をここに住まわせる！このクソハゲカス！
いや、そうでもねーな。」

「取りあえず名前教えてくれよ」

「は？」

「いや、名前。」

「お前人の話聞いてたのか？記憶喪失で忘れちったよ」

「え？本当に記憶喪失なのか？」

「当たり前だ！でなきゃ家でねてるよ！！」

「うーん。本当に記憶喪失か。どうしよう。交番？病院？病院やっ
てっかな？今何時だろ　　ってああ~~~~！！！！！！」

「あんだようるせーな」

「お前と話してたら8時になっちゃった！！！！学校遅刻やん！！」

「学校遅刻を俺のせいにするなよ！」

「ああ~~~~もっつ！！！！」

「学校ってなあに？」

じじじッッッ

じじじっしっし (後書き)

次回をお楽しみに!

池にある

とりあえず俺は学校に來た。名無しの女は家から追い出し、鍵をバツチリかけて家を出た。女は池を探すらしい。

「池が凄く気になる。池にはゼツテゝなんかある！」

水だよ。池にはゼツテゝ水があるよ。まあ面倒だからいわなかつたケド。

一時限目は理科か。移動があるな。

「おい遠藤！理科室いこーぜ！」

「おう。てかお前声うるせ。」

「お前の聴覚がすげーんだって。ハツハツハツ！」

八八八じゃねえよ。横山とは中学からの友達だ。下の名前は忘れた。悪い奴ではない。

「なあ知ってるか？」

「何を」

「お前が住んでる所って、昔鬼がいたんだってよ」

「聞いたことあるわ。それ」

「でさあ、歴史のレポートそれにしようぜ」

こいつは何言ってるんだ。噂を調べてどうする。

「割と有名なのはなしだよ、「三枚のお札」って昔話してるか？」

「あれだろ？山姥から三枚のお札をつかって逃げるやつ。」

「ああ。それと関係してるらしい」

「ほんとだよ」

「それを調べに今日、図書館にいこう」

メンド。でもまあ、いいか。早くレポート書こつ。

放課後だ。

「うしっ！じゃあ行くか！遠藤！

」
「おう」

結構早くついた。そして早く資料が見つかった。

正直驚いた。伝説の名前は「浅茅ヶ原の鬼婆」というらしい。
近くの池の跡地がどういう物かも分かった。

少し、ほんの少し、恐怖を感

じた

池にある(後書き)

「浅茅ヶ原の鬼婆」(あさじがはらのおにば)は、ちやんとした昔話です

安達ヶ原の鬼婆

昔、京の都に岩手という女性が三人の娘と幸せに暮らしていた。ある日、長女が病に掛かり喋る事が出来なくなってしまった。占い師曰わく、「腹の中の赤子の肝を与えれば病はなくなる」とのこと。

岩手は三人の娘を残し北へ旅立ち、奥州の安達ヶ原にたどりつき、その小屋で獲物をまつた。

何年かたち、一組の若い夫婦が一晩泊めてくれと訪ねてきた。なんでも、婦の腹には子がいるという。

岩手は夫が出かけている隙に婦の腹を切り裂いた。そして喜びに浸った。「これで娘の病は治る」と。

岩手は笑いつづけた。笑い疲れたところに、夫が帰ってきた。

夫は鳴きながら婦の名前を叫んだ。そんな夫を岩手は、

殺シタ

首を切り裂き、はらわたをえぐり出した。

あとは京にかえり、娘に会うだけだ。だが、岩手はきずいてしまった。夫の叫んだ名前。

どこかで聞いたことがある。不意に、夫婦の肉塊に目をやると婦の手にお守りが握ってある。それを見て岩手は全てを悟った。

殺したのは自分の助けようとした娘で、自分は娘とその夫と孫を自分の手で八つ裂きにしたのだ。

岩手の頭は乱れ、宿を借りにきたものを全員殺した。

岩手は鬼婆となってし

まった。

安達ヶ原の鬼婆（後書き）

次は三枚のお札です

三枚のお札

殺戮を繰り返した岩手のもとに、一人の坊主が宿をかりにきた。

岩手は坊主が寝ている隙に坊主を殺そうとしたとき、坊主はそれに気づき、一目散に逃げ出した。

岩手は坊主を追いかけた。坊主が札を投げると、札は大河になった。

岩手は大河の水を飲み干し、さらに坊主を追いかけた。坊主が2枚目の札を投げると、札はアリ地獄のようになった。岩手は先ほど飲んだ水を吐き出し、砂を滑らないようにしてさらに坊主を追った。

坊主が三枚目の札を投げると、札は炎になった。岩手は火傷をして気絶してしまった。

目が覚めるとそこは知らない所だった。どうやら家のようだ。

「お母さん！良かった！目が覚めたのね！」

知らない女性が二人いた。話を聞くと、二人は自分の娘で、姉の事をしり、安達ヶ原（奥州）まで岩手を探しに行き、倒れていた岩手を近くの街まで担いできて、医者に治療してもらったそうだ。

その後、岩手は浅茅ヶ原（江戸）で娘と宿屋をしながら幸せに暮らした。

三枚のお札（後書き）

次回は浅茅ヶ原の鬼婆です

浅茅ヶ原の鬼婆

岩手は娘と宿屋をしていたが、最早鬼婆となっしまい、旅人を殺す事を止めることは出来なかった。

岩手は旅人の頭を石で割り、賃金を奪ってから近くの池に遺体を捨てていた。娘はこの行いを見て見ぬふりしていた。

死者が999人に達した時、一人の若い男が宿を借りにきた。

男と三女は恋に落ちた。それを知った次女は男に訳を説明し、三女を連れて逃げるように言った。だが逃げた事が分かれば岩手は男を追う。次女は自分が囿になると決めた。

夜になり、岩手はいつものように寝ている旅人の頭を石で殴り殺した。

旅人の体をまさぐっていると、妙な事に気づく。旅人は男の筈なのにまるで女のようだ。

死体の顔を見て仰天した。そこには自分の娘がいた。岩手は自分の娘を二人も殺してしまった。

岩手は鳴きながら娘の死体を抱き、いつも死体を捨てていた池に身を投げた。

「それがあの池か。。」

俺は図書館で借りた本を読みながら呟いた。

なんと言うか、驚いた。結構マジメな話だったな。

「その話には続きがあるぜ」

「うわっ！いつ入ってきた！なんで帰ってきた！」

「自分ちに帰って悪いか？」

この女マジか？てか何かテンション低いな。何かあったのか？

い、いや。心配してるとかそんなじゃないゾ？

「何ブツブツ言ってるんだよ」

「いついや！別に。」

聞こえてないよな？エスパー？

「てか、続きってなんだよ。記憶なくしたんじゃないのかよ」

ちよつと意地悪に言ってみる。

「さつき思い出した。」

コノヤロツ

「全部思い出した。名前も、過去も、自分がどんな奴かも。」

？

「兎に角その話の続きを話すよ」

なんかしおらしい。落ち着かないな。

浅茅ヶ原の鬼婆（後書き）

コメント頂ければ光栄です。

関係あるさ

何なのだろう。落ち着かない。朝は凄くうるさかったのに、今は不自然なほど静かだ。何かあったのだろうか。

「お前、今日どこ行ってたんだ？何かあったのか？」

「お前には関係ねーだろ」

確かに関係ないが、何か気になる。しゃあねえ。

「関係あるさ。俺はお前の家族だ」

あーはずい。「あるさ」ってなんだよ。「さ」って。

「ここに住むの認めてくれんのか？」

「まあな。兎に角記憶治ったなら名前を教えろ。んでなにがあったかおしえてくれ」

「ああ。じゃあとりあえず、俺の名前は野菊のぎくだ。」

名字　　じゃないか。変わった名前だな。

「信じてくれないだろうけど、俺は

話をきいて驚いた。正直、信じられない。俺は言葉が出なかつた。

関係あるさ(後書き)

見てくれてありがとうございます。

野菊

岩手の手からにげた男と三女は数ヶ月後、事件があつた浅茅ヶ原の家に戻り、幸せに暮らしていた。

だが、岩手の噂は江戸中に広まっていて、男と三女の心を苦しめた。

そして男はストレスから女と浮気をした。だが、三女は咎めることなく男を愛し続けた。

ある日、男は知らない女を連れてきた。いや、知っている。男の浮気相手だ。その腹は大きくなっている。

男は口を開いた。

「このとおりだ。私はこの女と子を作った。この女を愛した」

知っている。以前から知っていた。でも、それでもよかった。

「知っていたわ。でもいいの。それでもあなたを愛してる」

「離縁しよう」

「？」

何故？三女は男を愛してるのに。何故、離縁なんてする必要がある？

それは至極簡単な事だ。

「私はこの女を愛している。お前を愛することはできない。離縁をしよう」

三女は怨みを覚えた。それが誰に対してか分からない。三女は無意識に包丁で男に切りかかった。だが逆に男は三女を殺した。

こうなることはわかっていたのだ。何せ、三女は鬼婆の娘だ。

さらに言えば、男は離縁などする気はなく、最初から三女を殺し

にきたのだ。

男は三女の遺体を岩手が身を投げた池に捨て、浅茅ヶ原の家で女と仲むつまじく暮らした。

「この浅茅ヶ原の鬼婆という話は、一つの家でおきた事件だからのちのち、一つ家の鬼婆とも言われるそうだ」

うーん。謎だ。色々気になる所はあるが、一番気になるのは何故、こんなにくわしい？

記憶を無くす前はオカルト好きだったのか？

「おい。何黙ってたんだ」

「あつ、ああ。悪い。でもよく知ってるな。こついつの好きなの？」

「。。」
やべ、禁句か？

「え、えーと、野菊だったよな？い、いやー変わった名前だね。」

「。。」
さすがに失礼か。

「な、名前といえば、登場人物の名前がわかんないから面倒だな」

「知ってるよ。名前」

やっとしゃべった。

「へ、へー。凄いね！よく調べたよ！うん！」

「。。」

「じ、じゃあ三姉妹の名前教えてよ」

「長女が桔梗。次女が笹百合」

「三女は？」

「三女は」

三女は

」

どうしたんだ？忘れたのか？

「三女の名前は」

野菊」

「ん？野菊？野菊ってお前と一緒にじゃん。あ、もしかして三女ってお前なんじゃね〜の〜？」

ちやかしてみた。

「

ん

まじで？

家族

普通は信じない。目の前にいる女は鬼婆の娘で、何十年、何百年も前に死んでいるんだ。だが俺の中の何か、いや、誰かが

「彼女を信じ、彼女を受け入れ、彼女を愛し、彼女に許しを請え」と呟く。誰かはわからない。聞いた事もない。

「わるいな。信じないよな、こんな話。忘れてくれ。」

凄く寂しそうだ。放っておけない。いや、放ってはいけない気がする。

「いや、信じる。お前を信じるよ、野菊」

「え？何だよ。普通は信じないだろ。お前の頭おかしいんじゃないか？」

「確におかしいかもな。でも、お前を放ってはおけない。記憶は全部思い出したのか？」

「い、いや、まだ少し曖昧な所がある けど」

「なら少しの間、記憶がはっきりするまでこの家に住むといい」

「いいのか？」

「ああ。家族にしてやるって言ったしな」

何故か抵抗がない。この女、野菊と家族になり、共に生活するのは運命なのかもしれない。

「あ、ありがとう　と　う」

「泣いてんのか？」

「ば、馬鹿　。　お　俺が　泣くわけ　ない　だろ」

「強がりやがって　。」

野菊に聞こえないくらいに呟いた。俺は微笑んでいた。野菊のこ
ういう所、嫌いじゃないらしい。いや、むしろ　。

「ケツ、らしくねえか。お前も泣くななんてらしくないぞ、野菊。」

「だ、だから泣いてねーって！」

「ハハハッ」

「わっ、笑うな、ボケ！！」

「さあ、もう夕飯だ。何か作るか？」

「オムライス」

「いいぜ！得意だからな！」

「不味いけどな」

「うるせえ」

何かコイツ、昔の人なのに現代的な言葉つかうよな。服も着物とかじゃないし。

まあ今度聞けばいいか。取りあえずオムライス作ろう。野菊うるさいからな。

「なあ野菊」

「んあ？」

「これから宜しくな」

「い、いいから早くオムライス作れ、バカ芳樹！」

「はいはい」

ホント素直じゃないな。まあそれがいいところか。ふと野菊を見ると、何やら旅番組を見てるらしい。箱根か？

「なあ芳樹」

「ん？」

「新婚旅行ここなんてどうだ？」

「は？」

「だ〜か〜ら〜、新婚旅〜お〜」

何いってんだ？この女。

「え〜と、誰の？」

「バカッ！俺達のに決まってるんだろ！」

「なんだよ新婚て！」

「だってお前が言ったじゃねーか！家族になろう、一緒に住もうって！」

「いやいやいやっ！そう言う意味じゃないからっ！」

オムライスを作る手は止めない。

「子供は何人がいいんだ？10人でも20人でも俺頑張るぜ？おっと、夜が大変だなあ。少しは寝かせてくれよ？」

「バツバカ！なにいつてんだ！恥ずかしくないのか！」

そんな話をしながら割った卵は双子だった。

家族（後書き）

ユニーク1000人を超えました。ありがとうございます。

「おいテメエ！どういう事だ！女の子を放置プレイって！」

「朝（昼か）からうるせーな！。そんな事より頭大丈夫か？」

「テメエ（怒）二人の愛の育みをそんなことってなんだ！しかも人を変人あつかいか！」

「いやいや悪かった。主語がぬけてた。さっき頭が痛いってうなされてたから」

「ああ？そんな事いつてねえ。今は頭より愛の方が大事だ！」

朝から疲れるな！。今日学校休みでよかったわ！。しかもあと3日行ったら夏休みだし。

とりあえず朝メシ食うか。

「野菊、お前何か作れるか？」

「卵かけご飯」

「チャーハン作ってやるよ」

「チャーハンって？」

「見りゃ分かる」

こいつの生きてた時代にチャーハンはないのか。

？

こいつの生きてた時代？こいつの生きてた？生きてた？

「な、なあ野菊？」

「ん〜?」

「お前は何年も前に死んだんだよな?」

「ああ。殺された」

「お前は今なんなんだ?もしかして、幽霊?」

「いいや。ちゃんと心臓は動いてるぞ?まあでも300年も生きる人間もいないだろ」

聞かなきゃよかった。少なくともこの女は人じゃないって事か。

野菜炒め

ねーみ。もう朝だ。しかも今日から学校だ。とりあえず野菊起こすか。

「おい、野菊。もう朝だぞ。起きろ。」

つていねえし。もう起きたのか？あいつが早起きなんて、何か違和感があ

「朝だぞ、起きろ！バカ芳樹！！」

「うわっ！！」

いきなり、ドアをぶち破る勢いで野菊が部屋に来た。

「朝ご飯作つといたから、早く準備して学校遅刻しないようにいけよっ。」

つって元気よく部屋から出て行った。何なんだ？兎に角飯食うか。

「おう芳樹！冷めねーうちに朝飯食え！」

テーブルにはご飯と野菜炒めと味噌汁がおいてある。

「なあ。これ全部野菊が作ったのか？」

「当たり前だ！他に誰がいるんだ？」

野菊は台所から叫んだ。今度は何作ってんだ？俺がテーブルにつくと、ほぼ同時に野菊が向かい合って座った。

「うまいか？美味しいか？」

ジアイアニズムかよ。まだ食べてねえし。

じゃあとりあえず、野菜炒めを食べてみるか。

「な、なあ野菊。これホントにお前が作ったのか？」

「お、おう。美味しくないか？」

「嫌、凄くうまい！驚いた！」

「ホントか！？良かった！」

凄く嬉しそうだ。コイツは時々、女の子らしい可愛い顔をする。

俺は野菊のそう言う所が、凄く愛おしく思える。

「じゃ、俺もたべよう。」

野菊が箸を取った。何か、一人じゃない朝ご飯は久々だ。最初に野菊がここに住むといった時は驚いたが、案外悪くない。

「おい芳樹、早くしないと学校遅刻すんぞ」

「ん？あ、ああ。」

変なこと考えてないで、飯食べて早く学校行こう。遅刻やだし。今何時だろ。

「 ああー！ー！ー！！！！」

「うわあ！なんだよ、びっくりさせんなよ！」

何だ、自分の事は棚に上げやがって。ってそんな事言ってる場合じゃない！もう8時10分！遅刻寸前だ！

「悪い野菊！学校遅刻しそうだからもう行くわ！」

俺は急いで家を出ようとした。

「まて芳樹！お弁当！」

「あ、ありがとう。コレも野菊が？」

「お、おう。残してくんなよ！」

「ああ勿論！じゃあなっ！」

「ま、まて！もうーっ！」

「今度はなん」

チユ~~~~~ウ

ん？何がおきた？唇に柔らかい物が、少し強めに、ぎこちなく当たっている。

「いつ、行ってらっしゃいの、チ、チュウ　だ。」

「え?」

「は、早く行け!遅刻するぞ!」

「あ、ああ。いつてき　ます」

俺は玄関のドアを開けた。

「は、早く　帰って　こいよ」

「ん?何か言ったか?」

「バ、バババ、バカ!!!何も言ってねえよ!早く行けクソ!」

ゲシッ!!!

行って!!!あの野郎、人の事蹴りやがった!

ファーストキスが野菜炒めの味だった。
。

野菜炒め（後書き）

いつも読んでくださり、ありがとうございます。

弁当

一騒動のあと、俺は学校に来た。今は休み時間だ。騒いでいるおそらくサッカー部と、それをみて笑う女子。俺アイツらみたいな女子なら野菊の方がまだマシだな。

「なーにがマシなんだ？」

「うわっ！なんだ、横山か。」

コイツは横山。名前は知らん。中学のころからの・・・デジャヴ？

「それよりよ。レポートどうすんだ？ちゃんと調べたか？」

ああ。コイツ前に登場してたな。一緒にレポート書こうとかいて。その内容は・・・。

「なあ横山。やっぱり違うヤツ調べようぜ？」

「おいおい冗談よせよ。俺メツチャ調べたぞ？」

横山には悪いけど、野菊の事を考えるとなんつーか、な？

「俺チヨ一調べたんだ！何か・・・」

そう言っつて野菊が話してくれたことと同じような事を、淡々と話し始めた。ただ、一つ新しい情報があった。野菊を裏切った男、つまり野菊の夫の子孫がこの時代に生きてるらしい。

横山は

「あくまで噂。だいたい、作り話の登場人物の子孫なんているかよ」

と言つてたが、俺は野菊が居るから信じるしかない。なんて考えてたら午前の授業が終わり、昼休みになった。

「おい芳樹。学食いこうぜ？」

「おじよ」

俺と横山はいつもこんな感じだ。なんつーか、コイツはあきない。だいぶ仲が良い。と自分は思っている。コイツは知らんが。

「さて、今日は何にしようかな」

俺が何買うか迷っていると

「どうせコロツケパンだろ？」

クソ、横山め。俺だつてたまには違うのも食べる。

「そいつお前はどうせサンドイッチ・・・」

つてもう買ってるし、サンドイッチ。

「お前いつもサンドイッチで言うけどさ、俺的サンドウィッチだと思つよ？」

また意味分からん事いつてきやがった。

「バカ。ウィッチだと魔女が作ったみたいだろ」

なんてくだらない言いながら、俺はコロッケパンを買った。

「よし食べるか！」

何かいつもコイツと食べてるな。

「あ」

「?どうした芳樹。」

そうだ。思い出した。今日は野菊が弁当作ってくれたんだ。しゃあない、今は弁当食べてパンは野菊にお土産だな。

「パン食べないのか？」

「やらん。」

弁当を出したら横山が絶叫し、「もう一緒に食べてやらん!」と怒鳴った。明日から一人で弁当か。

悩み

よしっ。学校終わったから帰るか。野菊の弁当がスゲー美味かった。

「ふう。」

ため息ついちった。さてどうするか。

野菊を裏切って、しかも野菊を殺した男の子孫が、今生きている。勿論、その子孫は野菊とは関係ない。でも野菊がそれをしつたらどうするだろう。

野菊は裏切った男を恨み、殺そうとした。だが逆に殺され、裏切った男は幸せに暮らし、子を残した。

どうするかな。野菊に言うべきか、いわざるべきか。迷ううちに家についてしまった。結局どうすりゃいいんだか。

「ただいま」

「う、うう。うううう……」

ん？なんだ？変なうめき声がきこえる。野菊か？

「おい。どしたん……！！」

「ぐ、ぐあああ……」

野菊が頭を抱えてうずくまっていた。

「お、おい野菊！どうしたんだ！？大丈夫か！？」

「ぐ、あ、頭が・・・痛・・・い。」

頭？前にも頭が痛いよ、うなされてたが、なんなんだろう。病気か？

「と、とりあえず、病院か？救急車？どうしよう！」

やべ〜。超テンパってる。ヘタレすぎるな。

「いや、大丈夫・・・だ。芳樹のおかげで落ち着いた。」

俺なんもしてないけど。

「とりあえず今日は休め。今度様子を見て病院にいこう。」

「い、いいよ！俺は大丈夫だ。病院なんて・・・いい。」

「いやいや、前も頭痛いっていったやん！今度の休みに病院いこう。いったほうがいいって。」

「いって！頭なんか痛くない！病院なんていなくていいんだよー！」

？なんでこんなに病院いきたくないんだ？

「それより芳樹！ちゃんと弁当食べたろうな！残してたら承知しねえぞ！」

「ああ、ちゃんと美味しくいただきましたよ。コレ、間違ってたか

ったパン。やるよ」

「お、おう」

「さて話を戻して、今度病院いくぞ。」

「クソッ」

「話の逸らしかたが強引なんだよ。で、なんでそんなに病院がやなんだ？」

「べ、別につ！別に病院いくほど痛くねーからだよ！」

「イツまさか・・・」

「なあ。お前もしかして・・・病院怖い？」

「！」

ずばしか。

「iiiiiiiiいやいや！別に怖くねえよ！怖いわけねえよ！」

「怖くないなら次の休みは病院だ。」

「う、ううう・・・。どうしてもか？」

「いいや。様子を見てだ。よくなれば行かない。」

「ほんとか!？」

「ああ。だから病院いなくてすむように、今日はもう寝る」

「おう！じゃあ俺もう寝るわ！おやすみー！ー！ー！ー！」

「おやすみ。」

何か・・・あつかいやすつ。

|||||

さて、風呂も入ったし、もう寝るか。野菊にあのこと言っかわないか、まだき決めてない。まあ明日考えるか。今日は寝よう。

俺は自分の部屋にいった。が！！！！

野菊のいびきがうるさいので今日はソファで寝る事にした。

悩み（後書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。ごまかしてまいります。

当然の一撃

もう朝か。ソファで寝たから首が痛い。野菊はまだ起きてないようだ。昨日すげー早く寝たのにまだ起きてないって事は、結構具合が悪いのかもしれない。

今日と明日学校にいったら夏休みだ。なるべく早く、野菊を病院に連れて行こう。

7時半か。準備してもう学校に行こう。・・・？

心なしか、リビングが片付いている気がする。溜まっていた洗濯物や食器も洗ってある。もしかして昨日野菊がやってくれたのか？きつとそうだ。アイツはあんな性格だが、割と家事が出来るらしい。

「ん〜。おはよう芳樹〜」

「ああ、おはよう野菊。具合はどうだ？」

「おう！バリバリ元気だぜ！」

なんか小三の男子みたいだな。

「つーか芳樹、早く起きたなら俺の事起こせよ。」

「ん？ああ、昨日頑張ってくれたみたいだからな。今日は休ませてもらおうと思って。」

「昨日？昨日なんかあったか？」

「掃除とか洗濯とか、野菊がしてくれたんじゃないのか？」

夏休み

「え〜。で、あるからしてっ、夏休みは非常〜っに気がゆるみやすい。」

バタッ

「なのでしっかり気を！引き締めて！楽しい夏休みをすごしまし
よう」

バタッ

「え〜、話は変わりますが・・・」

バタッ

||||| 30分後 |||||

「それでは話を終わりにします。楽しい夏休みを。」

あの野郎話長すぎるだろ。校長特権か？

「これで閉業式を終わります。一同、礼っ」

やっと終わった〜

「このあと、生活指導の先生からの連絡が・・・」

あ、意識が………バタツ

|||||

「……くん……藤くん……遠藤くん!」

「うおえ?」

「あ、気づきました?」

「多分」

「よかった。ナツが「鬼がついてる」なんて言うからしんぱいしちゃいました」

「うん?どんな状況だ?」

「閉業式で倒れた」

「うわっ!」

「失礼な反応だ。芳樹。」

「そうですねよ遠藤くん。ナツにお礼を言わないとダメです。倒れた遠藤くんを保健室まで運んできてくれたんです」

「憂も手伝った。」

「ああ、思い出した。校長のせいで倒れたんだ。」

「で、今日倒れた人数は？」

「あなたを入れて23人です」

いつもより少ないか。

「軟弱だな、芳樹。」

「うるせえ」

勝手に話を進めているが、コイツらの事を紹介しないとな。

まず、この敬語を使うのが瀬野崎憂佳^{せのさきゆうか}。

で、もう一人の背の低い、無表情がナツ（本名不明）。

二人は仲が良く、小さな頃からの友達らしい。ちなみにナツの本名は瀬野崎しか知らないと言う噂がある。

瀬野崎は面倒見が良く、ナツのお姉さんみたいだ。そしてナツは口数が少ない不思議系。オカルトが好きらしい。

「黒魔術とかやってる」

と自慢気に言ってきた事がある。嘘だろうとバカにした次の日、捻挫したのは偶然だと信じたい。

二人ともクラスメイトで、ナツが俺になついた事がきっかけで、瀬野崎とも話すようになった。

「なあ瀬野崎、今どんな状況？」

「今校内にいるのは私たち3人と先生だけです。」

「はい。遠藤くん」

「うん、バイバイ、芳樹」

「バイバイ」

さて、帰るか。

お被い

「ただいま」

「おかえり芳樹」

「おかえりなさいませ、芳樹様」

・・・あれ？何か多くね？

「お邪魔しております、芳樹様」

「あ、ええと、どちら様？」

「陰陽師だとよ。俺を被いにきたんだと。」

野菊が不機嫌そうに答えた。

「この野郎二時間ぐらい前にいきなり来て、

「あなたを被います！」（ものまね入ってる）

とか言いやがった。どついう事だ？なんで知らない奴にドア開けた瞬間死ねって言われなきゃなんねえ。」

大分怒ってんな。しかも似てねえし。

「ええと、とりあえずお名前は？」

「申し遅れました、わたくし、陰陽師の花開院椿けいかいんつばきと申します。」

「えと、椿さん。ご用件は？」

「この家に取り付いた鬼を祓いに来ました。」

「その鬼と言うのは野菊ですよね？」

「はい。」

何かこの人怖いな。

「おい何やってんだ芳樹。そんな奴早く追い出せよ。」

「だまりなさい魔性ましやうじやうの物。あなたとは話をしていません。」

「なんだとクソ女！」

「おい落ち着け！」

身を乗り出す野菊を止める。野菊と椿さんは気が合わないらしい。当たり前か、鬼と陰陽師だからな。

「と、止めるな芳樹！俺はやらなくちゃいけないんだ！みんなが！みんなが待っているんだー！……たはっ！」

言いながら倒れるモーション。こいつ俺のマンガ勝手に見やがった。

「何ふざけているんですか。」

そして椿さんの冷たいツツコ。

|||||

椿さんは野菊を被うために、わざわざ京都から来たらしい。椿さんの家は代々陰陽師をしていて、椿さんはそのあととりになる修行中らしい。椿さん曰わく、野菊は早く被わないと俺が不幸になるらしいんだが……

「ですから、今すぐお被いしましょう。それがあなたのためであり、野菊のためなのです。」

「勝手に決めんなクソ」

今日の野菊はことさら機嫌悪いな。

「被うっていうと、野菊はいなくなってしまうんですね?」

「はい。被う＝殺す、と思ってください。」

イヤイヤイヤ、怖いって。なんで静かな顔でそんな事言えるんだ。

「まったく、なんて野郎だ。まるで殺人鬼だな。」

「殺人鬼? 鬼はあなたでしょう?」

「なんだと!?!」

「まてまてまて！」

さつきと同じパターンじゃねえか。

「……すみませんが椿さん、お祓いは遠慮します。」

「え？」

驚いた顔だ。

「で、でも、早く祓わないとあなたが不幸になりますよ？」

「なんて言うか、今野菊がいなくなる方がやなんですよ。どんな不幸かわかりませんが、野菊がいなくなる事が不幸なんじゃないかなど。」

「キヤー！芳樹イイ男っ！」

うるせえな。

「つーわけだ、陰陽師！とつとこ京都に帰れ！ほれほれ、上洛じやー！」

「調子に乗りすぎだ。」

ゴツンッ！

「いつっ」

と言って椿さんは出て行った。

な。

明日は野菊を病院に連れてく予定なんだけど

診察

「よしっ、じゃあいくか。」

「どいじょ？」

「病院」

「いつてら〜」

「いつてき〜。椿さん来たら被われないようにきをつけろよ」

「やっぱいつてやるよ」

「よしおっけ」

野菊も椿さんは苦手らしい。まあ、自分を被おうとする人を好きにはなれないか。

病院へは電車で10分ぐらいだ。野菊は初めての病院&電車だが、まあ大丈夫だろ。普通にしていれば。

「こんなんじゃない俺はとめられないぜ！おりやつ！」

「馬鹿、改札飛び越えんな！」

先が怖いな〜。マジ静かにしてくんね〜かな〜。

そんな事を言ったらもう着いた。案外、野菊は静かだ。

「おい野菊、ここでおりるぞ」

「お、おう」

難なく、いや電車おりるだけで難があるわけないか。と思ったが
現実をあまくない。

「よ、芳樹……。」

「ん？何だ？」

「よ、酔った……おうえっ」

「わわわわっ！まで！ここで吐くな！」

なんで電車で10分ゆられただけで酔うんだよ！てか電車そんな
に揺れなかったんじゃね？

「兎に角便所だ！便所にいくぞ！こい！」

急いでトイレにきた。

「ここで待ってるから行ってこい！」

「んん！いつしょにきて！」

「馬鹿女子便だろ……っついてて！髪の毛ひっぱるな！」

以外にも診察は早く終わった。その理由が・・・

「あゝムカツク！何なんだ！電車で酔いながらはるばるきてやったのに解らないって！医者だろ！？」

「まあまあ、落ち着けよ。医者にも解らないことあるんだよ」

「しかも聞いた？」様子見しよう「っってもう様子見てきたんだよ！」

「わかったわかった。なんか買ってやるから」

「服買え」

男っばいんだか女の子らしいんだか・・・。

服

さて、無事診察も終わって帰りたい気分だがそうはいかない。野菊の服を買う事になった。

思えば野菊は自分の服を一着しか持っていない。

普段は俺の服を着て、今日みたいに出掛ける時は自分の服を着る。勝手に俺の服を着るのはどうかと思うが、上手く着こなして全く違和感がない。

まあ、とりあえず適当な物を買おう。男用の服でもいいだろ。いい感じに着てくれるし。

「おい芳樹、こんなのはどうだ？」

「あーあ、いいんじゃないのっ」

「ちゃんと見ねーと爪剥ぐぞ？」

何でそんな怖い事が簡単に言えるんだか。

「お前なら大丈夫だろ、何でも似合うし……え？」

「そうか！？似合うか！？まさか芳樹からそんな言葉がでるとは思わなかった！よし決めた！これにしよう！」

「いやいやいや、いや、いやいやいや。それはどうよ」

「あんだよ、何か文句あるか？」

嬉しそうな野菊の手には白と水色のかわいいフリフリワンピース

がある。

「芳樹が似合うなんていつてくれるなら、俺毎日これ着ちゃうかもっ！」

うわ。超嬉しそうだよ。迂闊に似合うなんて言うんじゃないかな。もうちょっとクールな奴買うのかわと思ったら、白と水色のフリフリで。

「おい芳樹っ、何してんだ、早くしろっ」

「な、なあ野菊。まだ時間あるしもうちょっと見てみないか？」

「まさか芳樹がそんな事言ってくれるなんてっ。今日の晩ご飯は何がいい？何でも頑張って作っつけてやるぞ？」

メツチャ女の子やん。話聞いてねえし。

まあ、こんなに喜んでるんだからいいか。そこまで変でもないだろ。

「化け物がそんな物を着るのですか？」

「ああん？」

ゲッ、この声は……。

「何だよ陰陽師。テメエこそ陰陽師らしく巫女服でも着てる。キモマニアなら喜ぶぜ？芳樹とかな」

「陰陽師は巫女服なんて着ませんわ。でも芳樹様が喜んでくださ

るなら着ようかしら。あなたから芳樹様を奪いとってあげますわ」

この二人、仲の悪さが普通じゃないな。しかも勝手に人の好み決めやがって。いや嫌いじゃないよ？むしろ好きだよ？

「お前じゃ奪えねえよ。それに芳樹は俺の事が好きなんだ。他の女になびいたりしねえ。行くぞ芳樹」

「お、おう」

「申し訳ありません芳樹様。家にお伺いしようと思ったのですが少しやる事が出来てしまいましたので、後日に致します。」

「あ、はい。じゃあまた今度」

「別に来なくていいぞ。その方が平和そうだからな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ん。」

？椿さんがなんか困ったような顔だ。いや、悲しそうな顔か？どっちにしても気になるな。

「芳樹様」

「何ですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・野菊と生きるなら、覚悟はしておいてください。とりあえず・・・・・・・・今日あたり・・・・・・・・」

「え？」

角

「ただいまー」

「おかえりー。ただいまー」

「おかえりー」

もうこんな時間か。

色々、主に野菊の電車酔いなんかで大分疲れたがなんとか帰ってこれた。

もう風呂入って寝たい気分だが、野菊が夕飯を作ってくれるらしいので少しだけ待とう。どうせ明日も休みだから遅くまで起きていてもいいだろう。明日は一日中寝る事になるだろうけど。

「芳樹、風呂入ってるよ。その間に作ってるから」

もう風呂の用意してくれたのか。

最初は、いきなりこの家に住ませるとか言われて迷惑だったが、こういう所は凄く感謝してる。

召使いになれとかいってたけど、あれは多分素直に泊めてもらうのが恥ずかしかったのだろう。結構かわいい所があるんだ。

「おい聞こえたか？早くしろよー。それとも一緒に入りたいのかー」

「今はいるよー」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・何かオカンみたいだな。

《覚悟はしておいてください。とりあえず、今日あたり》

《とりあえず、今日あたり》

！！

「野菊！」

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

急いで風呂をでて台所にいくと、野菊が頭を抱えてうずくまり、悶えていた。

「大丈夫か！どうしたんだ野菊！！」

「ああア！！ヤ、ヤメローー！！」

あ、頭がーッ、わ、割れる、ヤメロツ！
でてくるなア！！」

野菊の目は白目を向き、涙がにじみ出ている。

「おい野菊！！どうしたんだ！！大丈夫か！？」

「よ、芳樹！助けて！！イヤアッ！だ、ダメだ！早っ、早くッどっ
かイケ！に、逃げるッ！早く！！」

野菊は白目を向いたまま叫んでいる。

俺の方を見ていない。いや、俺がどこにいるか分からないんだ。
ただがむしゃらに、必死になって叫んでいる。

俺はどうしていいか分からない。

「は、早くッ、お願いだから早く逃げてくれ!!」

「一体どうしたんだ!お前がこんななのに逃げれるか!」

「お、お願いッ、お願いだからあ!!」

見間違いだろうか。頭を押さえる野菊の手の隙間から、尖った白い物が出てきている。

「あ、ああッ、よ、芳樹、逃げるオッ」

俺はどうすればいいのだろうか。

野菊のために何かしてあげたいが、どうすればいいのかわからない。

何も出来ない自分が悔しい、憎い。

「逃げて、芳樹。た、頼むからッ、逃げて………」

グサッ

「ぐあぁっ！」

包丁は俺の背中を貫いた。

「だ、大丈夫。もう大丈夫だ、野菊。心配するな。俺がいる。」

いつでもお前を止めてやる。

すまない。お前を苦しめてしまつて。

でも、もう大丈夫だ。

お前が俺のためになつてくれたように、

俺もお前のために、何でもする。

そのためなら、腕も背中も痛くない。

それ以上に、野菊が苦しむ事の方がつらい」

「グ……、グアアッ……」

抱きしめる力を少し強くする。

「だから、これからは二人で頑張ろう。」

お前の中の鬼が暴れたら、俺が絶対止めてやる。

お前のためなら、何も怖くない。

大丈夫。もう何も怖くない、心配しなくていい。

苦しまなくて、いい……」

野菊が俺の腕の中で泣いている。

「……………ウ、ううう……………あ、ありがとう芳樹。
ありがとう、ありがとう……………ありがとう……………」

「泣くなよ、らしくないな。」

お前にはもっと、もっといっぱい笑ってほしい。
もっといっぱい、お前の笑顔が見たい」

「う、うん、うん！」

わ、わかった。

いっ、いっぱい……………笑うから、もっといっぱい、
いっぱい笑うからッ」

……………
「……………」

見舞い

「体調はどうですか？芳樹様」

「もう大分良くなりました。いつもすみません、椿さん」

「いえ、芳樹様のためですし、それに……それに、私がもっと注意していたらこんな事にはなりませんでしたから」

「い、いえいえいえ！椿さんの言うことを聞かなかった俺が悪いんですよ！椿さんのせいじゃありませんよ！」

「ありがとうございます。でも、陰陽師として恥ずかしいです。事件を未然にふせげなかつたのですから」

「すみません」

「いえいえ！芳樹様のせいではありませんから！」

「あ、」

「ハハハ、」

「ふふふっ」

あの後、心配した椿さんが駆けつけてくれて俺は病院に運ばれた。幸い命に別状はなく、あと三日間もすれば退院できるそうだ。

入院生活は暇じゃないかと思っただが、椿さん、瀬野崎とナツ、ついでに横山なんかが見舞いに来てくれてさほど暇じゃなかった。

ただ心配なのが……、

「あの、椿さん。野菊はどうしてますか？」

「……今日も、来てないみたいです……」

「そ、そうですか、まあアイツ料理できるから飢え死にはしないでしょう、アハハハッ」

「……………」

|||||

芳樹様が入院したあと、野菊は一度も芳樹様のお見舞いに行っていない。

自分のせいで入院させてしまっただけで会いづらいのでしょうけど、芳樹様がそんな事気にしていない事くらいわからないのかしら。

陰陽師が鬼の心配するのもおかしいけれど、芳樹様も気にしているの少し様子でも見てみましょう。

ピンポーン

「……………」

ピンポーン

「……………」

ピンポーン

「……………いないのかしら」

ピンポーン

「野菊ー、私よー、椿よー」

ガチャ

あら、ドアが開いてる。やっぱりいるじゃない。

「野菊ー、勝手に入るわよー？」

返事はない。まあ入っても大丈夫でしょう。

「おじゃましてーす」

変わってない。前来たときと全然変わってない。

靴の置き方、半開きのドア、空気すら変わってない。

嫌な予感がする。本当に変わってない。まさか……………！

「野菊ー！！」

急いで台所にいくと、血の付いた包丁を持った野菊が膝を抱えてうずくまるように座っていた。

「何やってるのよ野菊ー！！まさかあの日からずっとこのままでいたわけ！？」

野菊の手足は青白く変色している。間違いない、ずっとこのままでいたんだわ。

「とりあえず立ちなさい！何か作るからまってて！」

「……………いらぬい」

「何言ってるのよ！あれから何も食べてないんでしょ！？何か食べないと死んじゃうわよ！？」

「いらぬい」

「ダメよ！ちゃんと食べないと……………」

「いらぬいっていつてんだろ！！腹減らねえんだよ、あの日から！！ずっと何も食べてねーのに全然腹が減らねえ！全然動いてねーのにどこも痛くならねえ！なぜだかわかるか？俺が鬼だからだ！化け物だからだ！」

「野菊……………」

「頭の角もはえたままなんだ。芳樹に会いたい。怪我の看病もしてやりたい。でもこんな角があつたら芳樹に会わせる顔がないだろ！化け物のまま、芳樹に会えるわけないだろ！」

またお腹が減った時に芳樹のクソ不味いオムライスが食べたい！芳樹が買ってくれた服と一緒にデートしたい！でも、もうダメなんだ。腹は減らねーし角ははえたままだ。芳樹のオムライスも食べねーし、芳樹が似合うつて言ってくれた服も、角があつたらきれねえ。俺は、もう化け物なんだ」

「・・・・・・・・あなた、馬鹿？」

「ああ!？」

「芳樹様がそんな事気にすると思う? 芳樹様はあなたが鬼とわかつた上で一緒に住んでたんでしょ? それをいまさらなによ、角がはえたくらいじゃ芳樹様はきにしないわ」

「てめえなんかになにがわかる!！」

「じゃあ自分で確かめればいいじゃない。角のはえた頭で芳樹様が買ってくれた服をきて、芳樹様に会ってみればいいじゃない」

「・・・・・・・・」

「私もう帰るわ、元気になったみたいだし。お腹がすかなくても一応何か食べなさい。自分で作れるんでしょ? 芳樹様がいつてたわ。それともうすぐ退院できるみたいだからちゃんと片づけしておきなさいよ?」

「・・・・・・・・言われなくてもちゃんとやらあ」

「そう、じゃあまたね」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あーっ、退院だ!!」

俺は伸びをしながらいった。まわりで何人かがへんな目でみたがきにしない。気にしたら心折れそうだし。

「退院おめでとうさん、遠藤くん」

「お世話になりました」

「もう来ないようにするんたぞ」

「はい」

何か犯罪おかしたっけ？

まあいいか、これから自由だ。思いっきり遊ぶぞー！

……結局、野菊は一度も見舞いに来なかった。

椿さんの話では元気らしいけど、やっぱり心配だ。

「芳樹様」

遠くで椿さんが手を振っているのので恥をかかないように急いで駆け寄る。

「椿さん、来てくれたんですか？」

「はい、退院おめでとうございます、芳樹様」

「ありがとうございます」

「いえいえ、じゃあ早速帰りましょうか」

「はい。そういえば、椿さん京都に住んでるんですよね？ずっとホテルに泊まってるんですか？」

「その話は今度改めてお話いたします。今日は芳樹様の退院をお祝いしましょう？」

「あ、はい。ありがとうございます」

違和感がある。そして恐怖感も。椿さんの様子がおかしい気がする。何かあるな。

|||||

家につくと、今まで前を歩いていた椿さんが俺の後ろにきた。

「どうしたんですか？」

「いいえ、何でもありませんよ？」

あゝ、わかつちった。これは多分、玄関開けたらクラッカーが鳴って、「退院おめでとー」だな。

横山とか瀬野崎とか呼んでくれたのかな？

ありがたい話だ。俺の退院を祝ってくれるなんて。

よし、クラッカーの音に驚かないようにしよう。凄くクールに入

いや、嘘だろ。野菊つてもっと、なんかこー、ちがったもん。

「本当に野菊ですよ、芳樹様」

「へ？」

「そ、その、退院祝いに、色々作ったから、その、食えっ」

「か、かわいい」

「えっ？」

やべっ、声に出ちった。

「よ、芳樹、今かわいいって……」

「い、いや、さっきのは」

「よしき……!……!……!」

「わ、馬鹿っ、抱き付くなっ!!」

「ふふふっ、今だけは良いじゃないですか、野菊の好きにしてあげても」

・・・そうだな。俺も少しだけ、こうしていたい。

party

「はい、あ〜んっ！」 これ野菊。

「あ、あーん」 で、これ俺。

「……………」 「これは椿さん。

「うまいか？」 また野菊。

「う、うん。んまい」 で俺。

「……………」 「つい溜め息が出る椿さん。

「じゃあもうイチヨ！あ〜んっ」 ハイテンション野菊。

「あ、ああ」 これまた俺。

「……………」 あの「 そうだ椿さん。早く言ってくれ。

「どうした？芳樹」 いやいや野菊さん。

「あ、あのさ」 もうそろそろや。

「ね、ねえ野菊？」 そうだよな？椿さん。

「早く食えよ、芳樹っ」 もういいよな？

「ジブンデクエルカラー！ツバキサンモイルカラー！」

「え？」

「え？じゃねえよ！」

「あ、ありがとうございます、芳樹様」

|||||

なんかかんやで退院祝いパーティーを開いてくれた。

パーティーと言っても、俺、野菊、椿さんの三人で小さいテーブルを囲んで、野菊の手作り料理を食べただけだが。

それでも十分嬉しい。久々に野菊に会えたんだ。元気そうだし、俺が買った服も思った以上に似合ってる。

背中も結構早く治ったし、いやいや、本当によかった！

「……………お、おい芳樹。な、何とも思わないのか？」

「なにが？」

「俺、芳樹の事刺しちゃったんだぞ？」

「ああ、その事か。あの時言つたろ？俺は大丈夫だって」

「俺、角もはえたままなんだぞ？」

「いや、角って普通ひっこむのか？」

「俺の事、怖くないか？」

「はははっ、怖いわけないだろ？むしろかわいいし」

「芳樹く〜。・・・大好き！」

「こ、こらっ、いきなり抱きつくなよ」

「いいじゃんかつ、久しぶりなんだから〜」

「・・・・・・・・・・・・・・・・バカップル、ですか」

あ、椿さん居るの忘れてた。

「ここまで仲がいいと、見ているこっちが恥ずかしいです」

「す、すみません」

「なんだ椿、餅でもやいてんのか？」

「こら野菊っ」

「……………すこしだけ、ね」

え？

っーか、前より野菊と椿さんの仲が良くなってる気がする。何かあったのか？

まあ仲がいいのは良い事だ。人間って言うのは友情で成り立っているんだ。

ピンポーン

お客さんか？誰だべ。

「芳樹様は座っててください。私が出ますから」

「あ、ありがとうございます」

椿さんはすぐに戻ってきた。

「誰でした？」

「男性でしたが間違えたみたいです」

家を間違えるのも珍しい。団地だからかな？

ピンポーン

まただ。

「今度は俺が行ってやるよ」

「悪い野菊」

そしてまたすぐに戻ってきた。

「誰だった？」

「女が二人。間違えたって」

二連ちゃん。少なくとも隣の家とは似てないと思うけど。

ブルルルル---

電話だ。次は俺の番だな。

「もしもし、遠藤ですが」

「（芳樹か？俺だ、直哉）」

直哉？誰だ？俺知らないぞ？

「えーと、どちら様？」

「（とぼけるなよ、俺だ。横山直哉）」

横山？俺の知ってる横山は・・・ああ、横山か。クラスメイトの。

「（もしかして芳樹、俺の名前忘れてた？）」

「そんな事ねえよ、ちゃんと思いついた」

「（忘れてたんじゃねえか！）」

うわっ。電話で大声だすなよ、耳いてえ。

「で、何のようだ？」

「（いやさ、お前の退院祝いやろうと思って、瀬野崎さんとナツツンつれてお前んちの近くまで来たんだけどさ、お前の家分かんなくなっちって）」

「勝手に人んちで祝おうとするなよ。今どこだ？」

「（お前んちと間違えて二回もピンポンされた不幸な家の前）」

まじかよ。一回目が男で二回目が女二人って言うってたな。横山と瀬野崎とナツ、完全一致じゃねえか。

「その不幸な家をもう一回不幸にしてやれ。じゃあな」

「（お、おい芳樹っ・・・）」

ガチャッ

玄関でまつか。

ピンポーン

「はい」

「うわっ、何でいるんだ？」

「俺の家だから。まあ入れ」

|||||

「いやー、まさか芳樹に女の友達がいるとは！つい家を間違えた
と思ったぜ」

「遠藤くん、私達以外にもお友達いたんですね」

「良かったな、芳樹」

この三人、横山と瀬野崎とナツは仲が良いのだろうか。

「おい芳樹、コイツら誰だ？」

野菊様が若干イラついてらっしゃる。

「えーと、クラスメイトの横山と瀬野崎とナツだ」

「「「よろしく」」」

三人揃ってあいさつ。

「よろしくお願ひします、開花院椿です」

丁寧に返す椿さん。

「けっ」

不愉快そうな野菊。

「おい野菊、ちゃんとあいさつしろよ」

「ああ？」

コイツの沸点はどんだけ低いんだ

「しゃあねえな」

そうそう、ちゃんとあいさつしないと。友情はあいさつからだぞ。

「芳樹の嫁の野菊だ」

おい野菊っ！嫁はダメだろ！

「おいおい芳樹く、友達どころか嫁までいるのかよ」

「遠藤くんのお嫁さんですか、うらやましいです」

「角はえてる。鬼嫁」

友情

「さあ、説明しろ芳樹」

「大丈夫、私は遠藤くんを信じてるから」

「信じてるぞ、変態芳樹」

もつめんどくせーよ。特に最後の奴が。

だがしかし、ここで説明を怠れば、俺の残り少ない学園生活が台無しだ。

野菊にあいさつしろなんて言うんじゃない。嫌までよ？まさか、こうなる事を予想して真面目にあいさつしたんじゃないだろうか。いやいやいや、何考えてるんだ俺。野菊は俺の事を夫だと思ってくれてるんだぞ？そんな野菊を俺は疑うのか？

きつと、野菊もこの状況をどうにかしようよ………笑つてやがる。あの野郎はめやがった。

「お前がこんな奴だとはおもわなかった」

「野菊さんのご両親にもちゃんと謝らないと、遠藤くん」

「死んで償え、変態」

もうガンガン来てるよ。完全に俺が悪者じゃん。じゃあねえ、良い感じにいいつくろうか。

|||||

「つーわけだ。俺は断じて悪くない」

俺はほとんどの事を話した。

どうして出会ったか、何故この家に住む事になったか、野菊が何者か、今回俺が入院した理由。

自分でも驚く程、口から言葉が出てきた。あとはこいつらが信じるかだ。

「ま、マジかよ」

「し、信じられません、そんな事が……」

「……………」

まあ、当然の反応か。こんな話、信じる方がどうかしてる。

「……………今話した事は全部忘れてくれ」

そつだ。それが一番良いのだろう。今更だけど、これは俺と野菊の問題だ。こいつらを巻き込むわけにはいかない。

「……………ナツは信じるぞ」

え？

「ナツツンだけじゃねえぞ。俺も信じる」

「わ、私も信じます!」

「な、なんでだよ。なんでこんな話信じるんだよ」

聞いてはみたが、本当は知っている。

俺達は友達じゃないか。固い絆で結ばれた、友人じゃないか！

そんな友達の言う事を、何故疑う必要がある？

そつだ、俺達は友達だ！

「何故信じるかって？そんなの当たり前だろ？」

ああ、ありがとう横山。

「そつですよ、遠藤くん。当たり前です」

ありがとう瀬野崎。

「決まってるぞ、芳樹」

ありがとうナツ。

「だつて」

「だつて！」

「だつて！！！」

そつだ、俺達は！

「「野菊さんに角はえてるじゃん」「」

・・・・・・・・・・・・・・・・へ？

「野菊さんに角はえてたら、大体の事が真実だろ」

「付けてる感じしませんもの。ねえ？」

「うん、妖気、感じる」

あれ？友情は？

固い絆で結ばれた友人は？

友情より角二本？

「良かったじゃねえか芳樹、話の分かる友達だよ」

「すごいです。こんなに簡単に妖怪の存在を信じる人なんて、陰陽師やってて初めてです」

待ってくれ。状況が良くわからないんだが。

「よしっ！じゃあ退院祝いパーティー再開だ！とりあえず自己紹介、芳樹のクラスメートの横山直哉でっす！」

「遠藤くんのクラスメートの瀬野崎優花です」

「芳樹の腐れ縁、ナツ」

あ、友達って言葉が出なかった。リアルで心が痛い。

「芳樹の嫁の野菊だ」

「陰陽師の開花院椿です」

……一応、退院祝いしてくれるんだよな。

「……遠藤芳樹です。野菊の……」

「家族、かな」

一日

「起きろ！芳樹！」

「起きてる」

朝から元気な奴だ。理想としては

「おはよう芳樹、良く寝れた？」

みたいに優しく起こして欲しいが、相手が野菊なら叶わぬ願いだろ。さっき想像した人おチチが大きかったし。その時点でもうダメだよ。

「背骨引っこ抜くぞ？」

あれ？聞こえてないよね？

|||||

「あー、暇だ」

何もやる事ない。こういう時には！

「寝るか」

「い、いきなり何言ってるんだよ。まだ昼間だぞ？ま、まあ、芳樹

がしたいなら・・・お、俺は、良いケド・・・」

・・・思春期か？

|||||

もう夕方だ。

「なあ野菊、晩飯何か食べに行くか？」

「おうっ、俺の作ったためしやー食べねえって事か？」

今度は何に影響されたんだ。

「そう言う事じゃねーよ。一日中家に居たから少し外に出ようと思っただけだ」

「別に良いけど、何にするんだ？」

「野菊は何がいい？」

「俺は何でもいいぞ。ラーメンでもいいし」

「そうか、じゃあ最近出来たファミレス行くか？」

「ああ、いいんじゃないか？そこが駄目ならなあ、別にラーメンでもいいし」

「あ、イタリアンとかどうだ？初めてだろ」

「イタリアンか、初めてだ。初めてといやあ、ラーメン何かも初めてだな」

前に食ってたよ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ラーメンにするか」

|||||

「「ただいま」」

「腹いっぱいだー。もう寝るか」

「よ、夜になったからってそんなに焦らなくても・・・・・・・・。まだシャワーも浴びてないのに・・・・・・・・」

めんどくせー。

|||||

「おやすみ、野菊」

「お、おやすみ」

「な、なあ芳樹っ」

「いいよ、気にするな」

「角、はえたままだ」

「大丈夫、野菊は野菊。変わりはない」

「……………ありがとう」

「……………」

「……………芳樹……………」

「なんだ？」

「スウ……………スウ……………」

寝言か。

あ、野菊のよだれが。俺の枕なのに。

思った以上に平常心が保てない。

一週間

月曜日

芳樹は俺より早く起きていました。

「何時に起きたんだ？」

と聞くと、11時と答えました。頭がおかしくなったのかと思って、病院に行くように勧めましたが、時計を見ると午後1時でした。昨日の夜に遅くまでテレビを見ていたのが悪かったと思います。

火曜日

今日、野菊が「相方」という刑事ドラマの、頭がいい方の人のモノマネをしていました。

野菊は自信満々でしたが、正直あまり似ていませんでした。

水曜日

角はまだはえたままです。

芳樹は気にするなと言ってくれましたが、やっぱり女の子として角があるのは恥ずかしいです。

「え？女の子？」

ゴンッ

木曜日

昨日野菊に殴られた頭がまだ痛いです。
いつもいつも一方的に殴られているので、仕返しをしようとしたが、女に手を挙げるのは気がひけるので止めました。

優しい男は好きですか？

金曜日

今日もいい天気です。俺は女なのに、いや、女の子なのに一人称が「俺」です。イメージチェンジをしようと思います。

「吾が輩の名は野菊である！」

土曜日

二次元の女の子は絶対に可愛い。オタクが恋するのも当たり前だ。だって容姿、性格、スタイル、すべてがそのキャラに恋をさせる為に設定されているんだ。

だから分かるか？

「二次元に恋する奴とかキモイ」とか言う奴なんて糞くらいだ！
二次元最高！！

「芳樹？何かあったのか？浮気したと見ていいか？」

日曜日

「一週間どうだったよ」

「糞だな。吾が輩は凄くつまらなかった。芳樹のせいだ」

「吾が輩やめるよ。前の方がよかったぞ」

「……………」

「……………」

「客が一人も来ないって芳樹、お前どんだけ友達いないんだよ」

「い、痛い、心が痛い」

「……………」

「……………」

「明日どこかいくか」

「どこに？」

「決めてない」

「……………芳樹と一緒にならどこでもいいよ」

「じゃあ家でもよくな？」

「……………」

「今日何日だっけ」

「えーっと、31」

ジブノヲナゲサメル

「行つて来まーす」

「いつてらっしやーい。早く帰つてこいよー」

「おーう」

今日から学校だ。なんという爽やかな朝！

生徒もまだ歩いていない。きつとクラスで一番だろう。起こしてくれた野菊に感謝だ。

「……………ちよつと寄り道してもいいかな……………」

いやいやいや、駄目だ。そうやって何回遅刻したことが。寄り道なんかせず一番で学校にいつて皆を脅かしてやるう。

|||||

「おはようございます!」

「おはようじゃありません、遠藤くん!もうお昼ですよ?新学期早々遅刻なんて……………この授業が終わるまで廊下に立つて下さい!」

「すみません先生、立ってます」

「よーしっ、じゃあ歌うかー！」

「「おー！」」

っー訳でカラオケに来た。

こいつらと遊ぶ時は基本カラオケだ。
まあ飽きないからいいけど。

「じゃあまずは私からーっ！」

「よっ！瀬野っち！」

「ユーウツ、ユーウツ」

一番は瀬野崎か。瀬野崎っていったらあの曲か。

「私の歌を聴けー！！！」

ほら来た、有名なアニソンだ。瀬野崎は以外とアニメが好きらしい。女の子だからBLとかが好きなのかと思ったら、割とギャルゲーが好きらしい。

「二次元の女の子って可愛いですよね。どうですか？遠藤くん。この子なんて、凄く恥ずかしそうな顔してっ。もう溜まりませんっ！」

とか言ってたな。

・・・・・・・・・・・・・・・・割とそう言う子好きかも・・・・・・・・

「いや〜、楽しかった！芳樹も混ざってカラオケなんて久し振りだったな」

「そうですね〜、やっぱり遠藤くんが居た方がいいですね〜」

「芳樹、乙」

おい待て、俺の知らない間に三人でカラオケ来てたのか。俺だけ誘われなかったのか。

「まあ怪我してたんだからしょうがないよな〜」

ああ、俺入院してたんだった。
なんか救われたわ。

「じゃあまた明日な〜」

「明日は遅れちゃ駄目ですよ？遠藤くんっ」

「また明日だ、芳樹」

「おう、じゃあな。また明日〜」

もうこんな時間か。野菊待ってるだろうし早く帰る。

この声にこの音、もしや野菊、自分を慰める行為をしているのか？
あ、あり得る。良くパソコンでこっそり見る大人向けアニメであるぞ？

結婚したのに、その、夜の営みがない妻がよく、自分を慰める行為をしている。

まさにその状態じゃないか。野菊最近そう言うのに敏感だし、一応野菊は俺を夫だと思ってるんだ。

明らかにそうじゃないか。野菊は今自分を慰める行為をしている。どうしよう。チョー緊張してきた。逃げるか？一旦玄関までいてもう一度大きな声で「ただいま」と言うか？

いやいや、男としてどうよ。今まで我慢してきた自分を慰めるている野菊が可哀想じゃないか。

男として、夫として、覚悟を決める芳樹！大人になるんだ！行くぞ！父さん、母さん、俺は今から、大人になります！！

バツ！

「今まで悪かった、野菊！だがもう大丈夫だ！俺も覚悟を決めた！もう自分を慰めなくていいんだ！」

「よしっ、覚悟はいいらしいなあ芳樹。今何時だと思ってんだ？はやく帰って来いっていったよな？今まで待たせたんだ、歯が全部無くなるくらいは覚悟しろよ？」

あれ？なんか違うね？自分を慰めてるんじゃないの？

「つておい！お前何食ってんだよ！」

「クツチャクツチャ、ガム、クツチャ」

「クツチャクツチャうるせーな！いつぱいあつたる！全部食ったのか！」

「うるせー！こんだけ待たせたんだ！ガムの10個や20個くらい無くなるはポケエー！」

「いやなくならねーだろ！いつからクツチャクツチャしてんだ！」

「朝」

「お前暇かよー！」

「暇にしたのはテメエだろ！学校なんかいきやがって！」

何言っただこの女。意味分からん。あーたまおかしーんじゃないの〜。

「とりあえず仕置きだ。このガムで窒息しろ」

こゝこいつ、こっちは自分を慰めてるんじゃないのかと心配したの〜。

「……………オニーでもしてる！」

「！」

あ、
言っ
ちや
った。
た。

名前

「じゃあな遠藤」

「おー、また明日」

長い一日が終わり、ついに放課後になった。いや、長かった。特に数学が。

「このあと何か用事がありますか？遠藤くん」

「よお瀬野崎。ナツとアイツ、えくと、誰だっけ？一緒じゃないなんて珍しいな」

「し、親友の名前くらいちゃんと覚えてあげてくださいよ……」

親友ね。名前なんだっけかな。

「一緒に帰ろうと思ったたら私だけ省かれちゃったんです！私頭にきちゃいました！」

「ほおー、マジで珍しいな。瀬野崎だけ省かれるなんて。どうしたよ」

「しりませんっ！ナツと横山くんの事なんていいですから、どこかに行きませんか？」

「わかるよー、その気持ち。俺なんていつも省かれてるもん。いいぜ、遅くならなかったら」

「ありがとうございます。私達だけで楽しんでしましょっ」

また野菊を怒らせないように早く帰らねーと。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

「到着です」

瀬野崎に連れてこられたのは、どうやらアニメのグッズばかりを取り揃えた店らしい。

見たことあるアニメもあるが、ほとんどが知らないアニメだ。多分深夜にやってるんだろっな。

「遠藤くんは初めてですか？」

「まあな。ナツとか横山とかとは結構来てるのか？」

「いいえ。ナツも連れて来たことないんですよ？ここに私の友達を連れて来るのは、遠藤くんが初めてなんです」

ほー、ナツも連れて来てないなんて、これは栄誉な事なのか？

「なあ瀬野崎、」

「あ、あのっ！」

「え？な、何？」

「あ、あの、二人きりなので、ゆ、優佳って……呼んでくれませんか？」

「優佳？ああ、瀬野崎の名前？まあ瀬野崎がそう呼んで欲しいなら、別に断りもしないけど」

「え、遠藤くん、私の名前忘れてました？」

あらら、みるみるうちに瀬野崎が小さくなった。
化学反応かしら。

「い、いやいや、忘れてないですよ？瀬野崎の名前はちゃんと覚えてるよ？」

「優佳って呼んで下さいっ」

「あ、ああ。えーと、優佳？」

「あっ、ああ〜んっ」

うわっ、なんかすげー色っぽい声出した。

「え？あっ、すみませんっ！」

そしていきなり謝った。

「……実は私、ナツ以外の人に名前で呼んでもらうのって初めてなんです。だ、だから、その、少しいい気分になっちゃって」

「へー、そうなんだ、優佳」

「ああんっ！・・・あ、す、すみません」

「いや、気にしなくていいよ、優佳」

「はあんっ！」

「じゃあ店の中見てみるか」

「あ、あの遠藤くん？やっぱり名前で呼ぶのは・・・」

「優佳」

「あは〜んっ！」

やべえ、大分おもしれえ。

「大丈夫？顔赤いよ？優佳」

「ああんっ！や、止めて、も、もう、私・・・」

「どうしたの？優佳」

「あああああ〜〜〜んっ！・・・！」

うわばっ、思った以上に声出しやがった。周りの人全員こっち見てる。

「ブドドッ」

「テメエ写メ撮んなキモオタ！ブヒヒッて言つなブヒヒッて！」

やばい、一刻も早くここから立ち去らないと。

「おい、一旦場所変えよう！立てるか？優佳」

「はうああんっ！わ、私、おかしくなっちゃうっくん！」

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

「ご、ごめんなさい遠藤くん」

「いや、俺も調子に乗り過ぎた。ごめん」

その後、立てなくなった瀬野崎を抱えて近くのファミレスに入
た。

何人かが不振そうな目で見てきたが、人たすけ全部をしていると
自分に言い聞かせ何とかここまでたどりついた。

「もう落ち着いた？」

「はい、すみません、迷惑かけちゃって」

「いや、俺が悪いから」

「違いますっ、遠藤くんのせいじゃありません。私が名前で呼んでなんてたのだから……」

「……………」

「今日は帰ろうか」

「そ、そうですね。今日は帰って落ち着きたいです」

「家まで送ろうか？」

「いえいえいえ！そんなに迷惑かけられません！」

否定はえー。

|||||

「今日はすみませんでした」

「いや、マジで俺のせいだから。気にしないで」

「……………すみません。じゃあまた明日、遠藤くん」

「よお、横山、ナツ。昨日どこ行ってたんだ？大変だったぞ」

「まあ色々あるんだよ。それより瀬野崎が妙にご機嫌だったけど何かあったのか？」

「優は芳樹と二人きりになれたから嬉しいんだ」

そんな事もないと思うけどな。

「まさか芳樹、野菊さんがいるのに瀬野崎とイイ事やっちったんじゃないのー？」

「許さない、芳樹」

「それはねーよ」

あるわけないよ。

「おはようございます、横山くん、ナツ」

「おう、おはよう瀬野崎」

「優、おはよう」

噂をすればなんとやらだな。

「おはようございます、遠藤くん」

「おはよう、優佳」

「おお、芳樹が瀬野崎の事を名前でごんごん！」

「んあつ！だ、ダメ、ですよ、みんな見えますから」

「ああ、ごめん、つい……」

「名前を呼ぶだけで感じさせるとは……。凄い事やったんだな。いや、感じさせるという事は……まさか今も!?」

「芳樹、不潔。優、淫乱」

「テメエ等何言ってるやがる」

「いんつ、そんな言葉どこで覚えたの!? ナツ！」

「せ、瀬野崎の中にはブルブルふるえる大人のオモチヤが……」

「入ってねえ！」

「入ってません！」

登校

「オハヨ」

「おせーぞ芳樹、朝飯作ってあるから早く食え。そして今日は買い物いくぞ」

「ワリーけど今日も学校だ。普通学校は一週間、土日以外は学校だからお前に付き合えるのは二日間だ。次の休みまで待っててくれ」

「あゝ？なら今日は休めよ」

「あのな、休みが多いと留年しちゃうんだよ」

「リュウネン？」

「簡単に言えば、また今の学年の勉強をするんだ。ヤバければ永遠高校生って事」

「意味わかんね。つまり俺より寺子屋みてーの方が大切ってか」

寺子屋で。

「別にそう言う訳じゃねえけどよー」

ピンポン

お？こんな朝から誰だろ。

「誰か来たから話は一旦終わりだ。兎に角今日は休めないから」

「あつ、テメエ！」

誰だか知らないけど感謝だな。朝から訪問は少し迷惑だけど。

「ハイハイどちら様？」

ガチャ

「おはようございます、芳樹様」

立っていたのは椿さんだ。ただ妙なのは……

「あゝ、椿さん？それってうちの学校の制服じゃないですか？」

「はいっ、芳樹様とお揃いです」

あゝ、何か可愛い。朝から景気がいいな。

「実は、芳樹様と同じ学校に転校したんです」

「マジですか！？家京都じゃないんですか！？」

「野菊の事もあるのでこっちに引っ越してきたんです。

私一人暮らしになったんです」

「いつからですか？今日？」

「えーと、二学期が始まった時からですけど……」

「へー、気づかなかった。何組ですか？」

「三組です」

三組？俺も三組だよな。親友の名前を忘れる俺でも、転校生が来たら流石に気づくぞ？

「芳樹様は二年生ですよ？学年が一緒なら同じクラスだったのですけど……。残念です。」

ああ、学年が違うのか。

「椿さんは何年なんですか？」

「すみません、まだ歳を教えていませんでしたね。芳樹様の一下の十六です」

「あ、俺より年下だったんですか。ずっと同じ年だと思ってました」

「そうならよかったのですが……。本当に残念です」

何か年下とは思えないくらい気品があるな。野菊もこんなならいいのに。

「何か言ったか？」

「うわっ！」

ビックリした。

「朝からなんか用かよ椿」

「ええ、今日は芳樹様と一緒に学校に行こうと思って」

「あつ、まだ用意出来てないんでちょっと待ってて下さい。急ぎますから」

飯も食ってねえや。椿さんも遅刻にしちゃ悪いから早くしないと。ちよいちよい野菊が役に立つ。

「なんだよお前も学校かよ。そんなにいいもんかね」

「ええ、凄く楽しいわよ。芳樹様と二人きりになれるし」

「芳樹はやらん」

「嫁の父かつ」

「あのよお、前から思ってたんだけどよー、芳樹と俺で話し方違くない?」

「.....」

「椿?」

「.....」

「おーい椿ー?」

「少し黙りなさ……」

「お待たせしました椿さん」

「いえいえ、全然待っていませんよ？」

「おいつば……」

「少しだけ黙って……」

「行きましようか椿さん」

「はいっ！」

「おいつ」

「じゃあ野菊、行ってくるから。戸締まりしとけよ」

「じゃあ行ってきましたね、野菊」

「お、おい」

「「行ってきましたーす」「」

ガチャッ

「………んだよ」

「野菊の元夫の子孫が居ると言う噂があるんです。少しでも野菊の為になるなら、あつてみたいとおもつて」

「……さ、さあ、野菊が待っていますよ？早く帰りましよう」

「え？あ、あのっ」

|||||

「ただいまー」

「おかえりー」

「椿さん、何か食べていきますか？」

「いえ、今日は遠慮します。明日も一緒に行きましょうね、芳樹様」

「あ、はい。送り返しましょうか？」

「いえ、大丈夫です。少しよつていく場所がありますので」

「そうですか。じゃあ気をつけて帰ってくださいね」

「はい、それではまた明日」

「また明日ー」

「……………」

「どうした野菊」

「……………何でもねえっ」

何だ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5052w/>

一つ家の鬼娘！

2011年11月26日01時56分発行